

一村一志

「夢の芽生える文化」創造のプラットフォーム
「八雲志人館」は、将来に向けて持続可能な
地域を創出することをめざして活動します。

「意宇六社めぐり」 揖夜神社と黄泉比良坂

「意宇六社めぐり」の締めくくりは揖夜神社です。意宇川河口から2kmほど東の、松江市東出雲町揖夜（いや）に鎮座していますが、地名「揖夜」が、社名では「揖夜」になります。「夜」とただ一文字違うだけで聞の匂いが立ち、なにやら怪しい気配に包まれます。それもそのはず。ここは「死者の国」にゆかりの深い神社なのです。



揖夜神社本殿

◆揖夜神社

山陰本線揖夜駅から、旧山陰街道を東にたどると、住宅街の中の小高い一角に、こんもりと樹木の繁る揖夜神社が現れます。
主祭神はイザナミノミコト。
『古事記』によれば、夫・イザナギノミコトとともに、日本列島を創造し、日本人の祖先となる神々を生んだ「国生み」の神様とされています。拝殿より一段高いところに大社造りの本殿が鎮座しており、杉の大木に囲まれた境内は広く、年月を重ねた荘厳な雰囲気があります。



拝殿

当社は、出雲国内で最も古くから文献に出てくる神社とされています。『出雲国風土記』（733年編纂）には伊布夜（いふや）社、『延喜式』神名帳（927年）には揖夜神社とあります。
また、日本書紀（720年）に、斉明天皇5年（659年）、「犬が死人の腕を食いちぎり、言屋社に置き去りにした。言屋、これをイフヤという。天子（みかど）が崩御される前兆である」と、揖夜神社の名が出てきます。そして、「この



拝殿の鏡

この話の背景にあるのは、出雲に「国譲り」をさせた大和（ヤマト）の中央政権が抱いていた、出雲の神様への恐れと云々。出雲においては、不祥事を聞いた天皇は恐れ、出雲大神の神慮を慰めなければならぬと、神殿の建造を急がせた」と伝わっています。実際、斉明天皇はその2年後に亡くなっています。

◆黄泉比良坂

『古事記』（712年）の「黄泉（よみ）の国」の章の結びに、「いわゆる黄泉比良坂（よもつひらさか）は、今の出雲の国の伊賦夜坂（いふやさか）という」とあり、『日本書



黄泉比良坂比定地

記」や『出雲国風土記』にも出てくる「いふや」が登場しています。「黄泉比良坂」とは「黄泉の国」つまり「死者の国」（あの世）と現世（この世）との境のことです。
亡くなったイザナミを慕って黄泉の国に行ったイザナギは、イザナミの醜く腐った姿を見てしまいます。怒ったイザナミは、醜女（しこめ）怪力のある女）や黄泉の軍団にイザナギを追わせ、最後にはイザナミ自身が追いかけてきますが、イザナギは黄泉比良坂まで逃げのびます。そして、千引（ちびき）の岩（動かすのに千人力を必要とするような巨石）を黄泉比良坂に置いて道をふさぎます。
この時、怒ったイザナミが「毎日、人を1000人殺してやる」と言ったのに対し、イザナギは「それなら毎日1500人の産屋を建てる」と言います。
『古事記』にはこのあと、「こういうわけで、一日に必ず1000人の人が死ぬ一方、一日に必ず1500人の人が生まれるのである」と記され、「人間の生と死の起源を語った神話」と解説されます。
揖夜神社の東方、東出雲町揖屋平賀に、「黄泉比良坂」比定の石碑が建っています。2本の石柱の間に、あの世とこの世の結果を示す注連縄（しめなわ）が張られ、その奥の暗がり、坂をふさいだ「千引の岩」を模した巨石3個が置かれています。

◆エビス様と鶏



千引の岩

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が、『知られぬ日本の面影』の中の「美保の関」という文章で、こんな話を紹介しています。
「美保の関の神さまは、ニワトリの卵がおきらいだ。卵といふしよに、ニワトリはメンドリもヒヨコもおきらいで、ことにオンドリときたら、あらゆる生きもののうちで、大きらいでいらつしやる。だから、美保の関には、ニワトリと名のつくものは、オンドリも、メンドリも、ヒヨコも、卵もない。
ハーンが取り上げた話は、こんな伝承に基づいています。
美保の関は、中海をはさんで揖屋の北に位置します。ここに鎮座する美保神社には、オオクニヌシの長男・事代主命（コトシロヌシノミコト）、別名・恵比寿（エビス）様が祀られています。

と伝えられる「岩坂陵墓参考地」があります。また、東出雲町に隣接する安来には、『古事記』にイザナミを葬ったと記されている「出雲国と伯耆国との境にある比婆の山」もありません。
「死者の国」への出入り口である「黄泉比良坂」近くに鎮座する、イザナミノミコトを祀る揖夜神社。そこに深いつながりが感じられます。

このエビス様が、夜ごと、揖屋の溝杭（ミゾクイ）姫のもとに船で通われ、鶏が鳴いて朝になるとお帰りになったそうである。ある十五夜の晩に、一番鶏がまだ夜も明けないうちにトキの声をあげ、あわてたエビス様は船を漕いで戻られる途中、櫂を流してしまいます。仕方なく左足を櫂の代わりにして漕いでいるとワニ（サメ）に足をかじられてしまいました。エビス様が、やつとの思いで美保関までたどり着くと、今度は正確なトキの音が聞こえてきました。怒ったエビス様は以来、鶏を「忌（い）むもの」とされたといわれています。
そのため、かつては美保関では鶏や鶏卵を食べなかつたそうです。さすがに、現在ではこの習俗はなくなっているようですが、美保神社のお祭りの当番（当屋）にあつた氏子の人たちは、今でも卵を食べないそうです。
卵焼きが好物だったというハーンは、「美保の関」の中でこんな茶目つ氣を見せています。「鳥屋という宿屋のかわいらしい給仕女に、わたくしは何気ない顔をして、しかし肚（はら）のうちではよせばいいと思いつつながら、こんな冗談口をたいてみた。『アノネ、タマゴハ、アリマスカ。』女は観音のようににこにこ笑いがら答えた。『ヘエ、アヒルノ、タマゴ、ガ、スコシ、ゴザリマス。』こりや驚いた！」
思わず微笑んでしまう、このエピソードが、あの鯛を抱えたエビス様の笑顔を思い起こさせます。人間味あふれるエビス様。片や怒れる神、祟る神、あるいは黄泉の国——出雲の神々の世界は、なんと奥深いことでしょう。
（交易場修）

◆後記

「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を礎に発信していきます。
ご投稿はメール、ファクスでお願いいたします。